

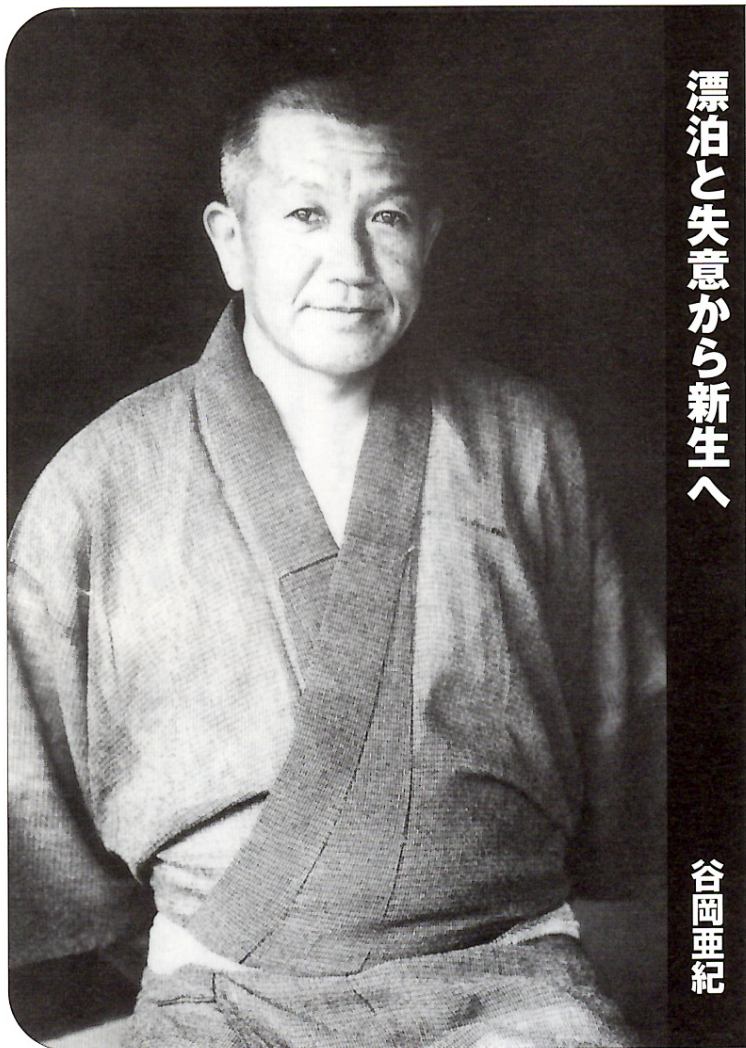
新

歌人群像

# 吉井勇

漂泊と失意から新生へ

谷岡亜紀



私の郷里高知に「瀧風」という酒がある。限定販売のためなかなか手に入らない逸品で、さらりとした辛口である。吉井勇はこの酒を愛した。実は「瀧風」という命名も勇本人による。五十歳を目前にした昭和九（一九三四）年、妻のスキヤンダル、離婚、爵位返上という失意を経験した勇は土佐隠棲を決意、翌十年、菲生の山峡・猪野々（現在の高知県香美郡香北町猪野々）に草庵を結び「溪鬼荘」と名付けた。以後、昭和十三年に京都に転居するまで、実質的に土佐を住処と定めたのだ。ちなみに現在、同地には「吉井勇記念館」があり、勇の長男滋氏が名誉館長を務めておられる。一方「溪鬼荘」は長く存続して来たが、たいへん残念ながら、昨年末に取り壊されたと聞いた。

## 伯爵家といひ出自

吉井勇は明治十九（一八八六）年十月八日、吉井幸藏伯爵の次男として東京の芝高輪に生まれた。祖父友美は薩摩藩士で、西郷隆盛、大久保利通らと維新に奔走、その功勞によって爵位を受け、のち枢密顧問官となった。維新前後には坂本龍馬とも交流があり、吉井勇記念館には「吉井家と龍馬」のコーナーがあ

る。父幸藏は少年時代に欧米に留学、海軍士官をへて貴族院議員となった。また帝国水難救済会会長としても知られる。同会は短歌と関わりが深く、「心の花」の石樽千亦をはじめ多くの歌人が勤務した。自伝『私の履歴書』の記述によると、勇が少年時代はじめて詠草をみてもらったのは石樽千亦であったという。

勇は明治三十七年、十九歳で肋膜炎を病み神奈川県鎌倉材木座海岸に転地療養。吉井家別荘で約一年を暮らし、以後短歌に熱中した。〔注〕資料として当たったいくつかの吉井勇年譜には若干の異同がみられるので、ここでは番町書房刊『吉井勇全集』（8巻十補遺I巻）の「年譜」（木俣修編）に従うこととする。なお、この全集編纂を初めとして、吉井勇研究に木俣修の果たした業績はたいへん大きい。

明治三十八年、早稲田大学高等予科文科に入学（のち政治経済科に転じ、退学）。同年、新詩社に入社し「明星」に出詠。与謝野鉄幹（寛）、北原白秋らを知り、幾度か共に旅をする。特に四十年に訪れた九州でキリシタン文化に触れたことは、以後の彼らのエキゾチシズムへの志向に大きな影響を与えたと思われる。一方、明治四十年に勇は森鷗外の「観潮楼歌会」に初めて参加。以後二年ほどの間に、

白秋・木下圭太郎らと新詩社退会、「明星」終刊、耽美派の拠点となった「パンの会」発足……と、当時の文学潮流にともなうて勇の青春もめまぐるしく動いてゆき、明治四十二年には鷗外監修のもとに「スバル」を創刊。石川啄木、平野萬里とともに編集に当たることとなった。また同年、初めての戯曲「午後三時」を発表。以後、戯曲を中心とした演劇、芸能の世界は勇のもう一つのライフワークとなつてゆく。勇二十四歳だった。

### 『酒ほがひ』の世界

明治四十三年（一九一〇）年、第一歌集『酒ほがひ』が出版された。装幀高村光太郎、カット藤島武二、口絵木下圭太郎という豪華な顔触れで、青年勇の交遊関係が彷彿される。タイトルは、酒を寿ぐ、あるいは酒をもって寿ぐという意の古語で、当時の勇の放蕩、無頼、漂泊への思いが端的に示されており、加えて「青春という美酒」とのニュアンスも感じられる。このスキャンダラスな青春賛歌は、多くの文学青年たちの注目を集めた。なおこの年には、寛「相聞」、若山牧水「別離」、前田夕暮「収穫」、啄木「一握の砂」なども出版されており、短歌史にとつてたいへん画期

的な年だった。

『酒ほがひ』は恋の激情をテーマとした連作「痴夢（一―三）」から始まる。

いくたりの男のために取られたる手かは知らねど我も取りたる

かなしみを抱くがごとき心地してその夜君をば抱きけるかな

一連のキーワードを収録作から拾うと「悲しみ」「運命」「悪」「涙」「なげき」「あやまち」「別れ」「秘密」。大変ドラマチックであり、虚実にこだわらずイメージを自由に発展・展開してゆく方法論が見て取れる。根底にあるのは、悲劇をも含めた〈物語〉への強烈な志向であり、歌集では明確な主題意識の



文芸雑誌「人間」の講演旅行で。左より久米正雄、里見淳、田中純、勇、小山内薫（大正11年）

# 吉井 勇



京都・祇園の白川南通にある「かにかくに」歌碑の前で（昭和33年）

もと各連作が構成されている。

夏はきぬ相模の海の南風みなふうにわが瞳燃ゆ  
わがこころ燃ゆ

君にちかふ阿蘇のけむりの絶ゆるとも  
万葉集の歌ほろぶとも

鎌倉滞在中の恋がベースとなった作品である。情熱的な恋愛至上主義に「明星」の影響は顕著だが、勇の作品の特徴は平易で単純明快な直叙体にある。純情を単刀直入にぶつける歌い口が、初句切れの文体にも明らかだ。

この初句切れが『酒ほがひ』には大変多い。ちなみに、一首目にもある通り十代の勇は海の歌を好んで作った。勇自身は海軍士官であった父の影響を述べているが、くわえて私は「海洋歌人」「海と酒の歌人」と呼ばれた石樽千亦の影響を指摘しておきたい。若き勇にとつては、海もまた青春の象徴だった。

かにかくに祇園ぎんはこひし寐ぬるときも枕まくら  
の下したを水のながるる

連作「祇園冊子」より。一連では、「紅楼こうろう夢」に象徴される歓楽・逸楽と、「蕩児のかなしみ」との落差をもつて、ドラマチックに京情緒が歌い上げられている。

吉井勇の第一歌集『酒ほがひ』の文学的価値は、いわば享楽主義者としての青春像を自己プロデュースし、その美学に実人生を添わせる形で、放蕩、流離、ロマンチズム、エキゾチズムといったドラマ性を紡いでいった点にみることができる。歌集から、私の最も好きな酒の歌二首を挙げておきたい。

酒びたり二十四時じふしを酔狂すゐきやうに送らむとし  
てあやまちしかな  
わが胸の鼓つづみのひびきたうたらりたうた  
うたらり酔へば楽しき

## 新生への希求

『酒ほがひ』刊行の翌年あたりから吉井家の家運は傾き始め、自宅の転居が重なるようになる。それにともなつて勇の放浪癖はつり、家に帰らないことが多くなった。以来、昭和十三年に京都に居を定めて一応の安住を得るまで、旅と転居、仮寓を繰り返すのである。一方大正十（一九二二）年に、柳原義光伯爵（柳原白蓮の兄）の二女徳子と結婚。勇三十六歳、徳子二十二歳。「徳子は細面の美人で、趣味は絵封筒を集める事。家庭料理が上手」（村松梢風「吉井勇」）。大正十五年、父が隠居し家督を相続。翌年父幸藏死去。父の負債を背負い込むことになる。そのような中で勇は妻と別居、昭和八（一九三三）年には「ダンスホールのジャズの音色に魅せられてゐる妻」のスキヤンダルが新聞沙汰になり、やがて離婚。さらに隠居を宣言し爵位を返上。『酒ほがひ』とともに勇の代表歌集とされる『人間経』は、そうした波乱と苦悩の渦中で昭和九年に出された。

家にあれどなほ旅にあるこころしぬわ  
が綻はなびを縫ぬいふひともなく



晩年を過ごした京都・白川沿いを行く勇（昭和28年）

吾子を思へば縊れかねつと云ふ歌のありしを思ふとある夕に

ふたたびは世に出でじなど思ひつつ葦生の峽にひとり籠らふ

猪野々なる山の旅籠の夕がれひ酒のさかなに虎杖を煮る

空海をたのみまるらす心もてはるばる土佐の国に來にけり

われとわが野晒し姿まざまざと目にこそうかべ夜半のまぼろし

ここには『酒ほがひ』のようなけれん味や派手さはない。あるのは、一人の人間としての苦悩と、寂寞とした人生への思いである。

特に相模野（南林間）での妻との別居生活を歌った前半には、孤独の中で死を思う歌が頻出する。「世のひとの嘲るこゑ」を聞きながら、勇が徐々に「世を捨てる」決意を固めていったことがわかる。かつて「紅灯のちまたにゆきてかへらざる人をまことのわれと思ふや」（『昨日まで』）と歌ったように、無頼や放蕩という文学的に脚色された自己像の背後には、酒が醒めた後の二日酔いのような苦い悲哀が常に沈澱していた。人生の失意が重なり、五十歳を目前にしてそうした思いがいよいよ顕著になったのが、この『人間経』であると言える。わけても五、六首目の引用歌のように、歌集に仏教的な諦念を思わせる作品が散見されることに注目したい。「経」とは、人間の行く道であり、その教えに他ならない。

そのとき勇が選んだのが、葦生の峽・土佐猪野々での隠棲生活だった。このように『人間経』は、勇が虚の世界ではなく実、すなわち実人生の現実と直面し、仏教的諦念を通過することによって人生の新生を果たす、その再起の軌跡として読むことができる。

## 京都での晩年

冒頭に述べたように、勇は昭和十年に正式

に猪野々に庵を結び、以来三年間高知に居を定める。その間、十二年に再婚、いよいよ人生の再出発を果たすことになった。

昭和十三年の秋、いわば魂のリハビリを終えて、高知から京都市左京区北白川に転居以後、吉井勇は死まで約二十年を京都に暮らす。その死は昭和三十五（一九六〇）年十一月十九日。享年七十五歳。病名は肺癆<sup>はせう</sup>。ちなみに命日は、全く偶然ながら私の誕生日と同じ日である。

生前最後の歌集は『形影抄』で、昭和二十五年までの歌が収められている。一方、二十六年以降の未刊作品は、木俣修によって『形影抄』以後として番町書房『吉井勇全集』第三卷に収録された。その『形影抄』以後から、吉井勇の晩年の作品を挙げておきたい。

カフェブランタンの壁の楽書いまも目  
にあれど若き日のわれやかへらさず  
おほらかに土佐の銘醸瀧風酌みし日お  
もふ夜半の寝覚めに  
京に老ゆ若狭かれひのうす鹽をこよなき  
酒の肴とはして

（たにおか・あき「心の花」）